

書評

眞嶋俊浩著

『平和のために戦争を考える——「剥き出しの非対称性」から』

(丸善出版、2019年)

濱村 仁

本書は、戦争倫理学・軍事倫理学を専門とする著者が個別に発表してきた何篇かの論文を加筆修正し、書き下ろしを加えてまとめた著作である。最も弱い立場にいる人々が極端な暴力に一方向的に晒される「剥き出しの非対称性」を切り口に、戦争その他の暴力の悪を暴くことで、真摯に平和を希求・実現する道を拓くというのが全体の趣旨だが、各章の内容にはそこまで統一感がないので、論文集に近い。評者に倫理学の素養がないこともあって、以下の書評は門外漢のつまみ食いの感想になってしまうが、御海容願したい。

本書の鍵概念は「極端で、実質的で、悪い非対称性」を意味する「剥き出しの非対称性」だが、評者も政治学者として権力関係には関心があるのでこれには注意をひかれた。この非対称性を著者は様々な局面に見出だしているが、それが比較的有用な分析概念として機能していると思われるのは遠征軍事介入を論じた第3章である。そこで著者はロディンの議論を参照しつつ、「剥き出しの非対称性」をつくりだす遠征軍事介入では、介入国の軍隊が被介入国の民間人に危害を及ぼさぬよう特別厳格な制約を自らの戦闘方法に課すことで、戦争の悪を最小限にすべきと主張する。いわば、「極端で、実質的で、悪い非対称性」を各要素に分解し、「極端」で「実質的」な優位にあるから「悪さ」の最小化が求められるという議論のつくりになっている。

この議論の肝は、被介入国側の「戦争における正義」の基準を下げずに、遠征軍側に同基準を上回る追加的制約を課す点にある。とすれば、かつて著者が提起した、軍事目標物への攻撃の付随的被害を受けた民間人に対する補償という回復的正義の観点から「戦争における正義」の既存の議論には欠けているという論点もここに組み込めるかもしれない⁽¹⁾。

ただし、遠征軍事介入の「剥き出しの非対称性」を考える上で、見落とされた論点もある。著者も述べるように遠征軍事介入が国家の存立に直接関わらない「贅沢」な戦争だとすれば、三浦瑠麗が論じるように、かかる戦争を決定する現代の先進民主国家において、異国の地で血を流すことを求められる軍人と、国内で変わらぬ日常生活を送る民間人の間には、大きな非対称性がある。民意の支持を背景として政治指導者が下した「贅沢な」戦争の決定に軍事的合理性の観点から納得できなくとも、文民統制が貫徹したプロフェッショナルな軍隊は従わざるを得ず、志願兵制のために民間人と軍人が分断されている状況で、血のコストの不均衡に民意は必ずしも我が事として向き合おうとしない⁽²⁾。つまり、いわゆる民間人保護の問題とは逆に、軍人こそが民間人と比べて弱い立場にある逆説が生じている。これは「戦争における正義」ではなく「戦争の正義」に関わる問題だが、非対称性を考える際にこの点は見逃せないだろう。

この点が問題視されにくいのは志願兵制によって兵士の同意確保という擬制を維持しやすいからだが、それに関係して注目に値するのが、自殺攻撃を論じた第5章である。そこで著者は、攻撃実行者の道徳的な地位・責任を自発性によって区別して議論を展開しつつも、自己犠牲の「事実上の強制」が最も残酷な「剥き出しの非対称性」を生み出すと最後に警告している(100頁、強調引用者)。これは安易に「自発性」の有無で行為者を評価することの限界を示唆したと読めるが、そうだとすれば、軍の場合も志願兵制だからといって「剥き出しの非対称性」に目を瞑るべきではないだろう。

注

- (1) 眞嶋俊浩『民間人保護の倫理—戦争における道徳の探求』北海道大学出版会、2010年、43-47頁。
- (2) 三浦瑠麗『シベリアンの戦争—デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年。同『21世紀の戦争と平和—徴兵制はなぜ再び必要とされているのか』新潮社、2019年。